



中国日本商会

今どきコラムー65

中国雑談

米国の「タカ派」

しばらく道草を食い、東京などで深セン BS テレビの仕事をして、2分のセリフをなんと一時間も掛けて繰り返して撮影し、へとへとになるまで疲れているうちに、5月はもう終わろうとしている。

北京に戻り、中米関係に目を向けると、米国問題の門外漢である筆者もついろいろ考えてしまうほど、複雑化しているように感じる。

アメリカが仕掛けてくる貿易紛争はそう簡単に終わろうとしないだろう。トランプ氏の「芸術的取引」は確かに威嚇的だが、その要求には応じやすいと思う。中米貿易紛争は、強烈にトランプ氏個人の色がにじみ出ており、その本質はまず過剰な要求に始まり、相手を崖っぷちまで追い込んでから、あらゆる方法で恫喝するというもので、特に予測不能な行動により相手側に今後も次々と必殺技を繰り出してくると感じさせ、精神的に相手を追い込むことによって交渉の中で有利な条件を勝ち取り、ひいては欲するがままに欲しいものをなんでも手に入れられるようになるというものだ。

しかし、中米貿易紛争の中でトランプ氏個人が最も関心を持っていることは、それほど予測不可能なことではなく、米国の貿易赤字に過ぎないように思える。この問題は、実はそれほど解決が難しいものではなく、単なる価格交渉に過ぎない。中国には「成約しない価格があるだけで、成約しない商品はない」ということわざがあるが、米国が関税賦課といった「減量」手段を用いず、「増量」手段を用いれば、つまり中国の米国からの輸入を増やすための交渉ならば中国は必ず喜んで席につくだろうし、双方が共に納得できる数字をはじき出すことができるだろう。

けれども、米国の過度な要求でも、ホワイトハウス閣僚の「タカ派」の要求は満足させるか。これは難しいと思われる。

トランプ氏就任後、幾度もの意見調整を経て、その閣僚メンバーと顧問の中の親中派の声はしだいに埋もれ、タカ派が主導的地位を占めるようになった。これらのタカ派人物の



注目点と要求は、トランプ氏のものとは異なる。トランプ氏は民主選挙で選ばれた政治家であり、一方でビジネスマン出身である故の思考方法で、貿易赤字という短期的で理解しやすい(その実、彼自身が簡単であると思い込んでいる)目標により関心を示しているが、タカ派の閣僚たちはそれとは異なり、彼らは、「中国を変えたい」といったような、より深くより長期的な要求を持ち、それを簡単にいえば中国の国家資本主義制度を変え、国の力で中国企業の国際競争への参与をサポートするといったような「不公平」な手段をとることをやめさせようと要求している。

こうした面において、中国は実質的な譲歩をするのか。これらは交渉する際のカードという性質の問題ではなく、中国の国家発展戦略に直接的にかかわる問題で、中国の発展戦略は、この国の経済制度によって決定されたものであり、中国共産党政権である限り、中国はこうした制度を変えることはない。

心配なのは、中国のこうした制度と米国が遵奉している制度は互いに相容れないもので、中国と米国の両国が世界で競争を繰り広げるとき、この異なる制度、異なるモデルが引き起こす衝突はどんどん増え、ますます激しいものとなることだ。

(『日系企業リーダー必読』編集長 陳言)